

暗黒の欠片 vol. 3

時刻表

奇怪伯爵

あっちゃん、ゴメンね。

ママは、約束を守ることができなかった。

あなたは、ママの夢。

私の期待どおり、良い子に育っていた。

そう、あっちゃんは何も悪くなかった。

原因は、やっぱりパパ。

私たちの望む生活は、パパのせいで手に入らなかったの。

あなたは知らないけれど、私は故郷では際立った存在だった。

小さい頃から、皆が私のことを褒めてくれていたわ。

怒られることなどなかった。

たまに失敗もしたけれど、誰からも責められることはなかった。

子供ながらに、私は特別な存在だと自覚していた。

それは、中学、高校に入っても変わることはなかった。

お人形さんのようね。

大人は、ママをそのように喩えたの。

高校を卒業する頃、ママは東京に行こうと決心した。

大きな場所に出れば、私はもっと上の世界に行ける。

そんなことを考えていたの。

でも、東京での生活は、そんなに甘いものではなかった。

いくら私が故郷で褒められた存在であっても、それは過去の栄光に過ぎなかった。

私より綺麗な人は、大勢いた。

私より才能のある人は、そこら中に溢れていた。

何度故郷に帰ろうとしたか、わからない。

初めての挫折に、ママはどうしようもない孤独を感じていたの。

そう、現実を受け入れることができないでいた。

孤独を感じることも、自分自身が許せなかった。

私は、違う。

皆とは違う、特別な何かを持っている。

実際故郷では、皆から常に特別視されていた。

家族だって、例外じゃない。

ママのママ、つまりお祖母ちゃんですら、私を大事に扱ってくれた。

怒られた記憶だって、あまり覚えていない。

だって、ママは賢かったのよ。

どういことをすれば、大人が褒めてくれるか。

子供心に感じ取っていたの。

これは、ママが日頃からあちゃんに言っていることよ。

あなたが芸能界に入ったら、これは必要なことなの。

このことは、お祖母ちゃんから教わったことじゃないの。

ママが自分で覚えたことなの。

お祖母ちゃんは、教えてくれなかった。

子供の頃、何かを言い聞かされた気がするけれど、調子良く返事だけして、内容は忘れちゃった

。

あの時の、お祖母ちゃん言葉、何だったかしら……。

夜の闇が、小さな駅を覆っていた。
申し分程度の電球に、蛾の姿が重なる。
昼間の暑さも幾分治まったものの、湿気による不快感が肌に纏わりついていてた。

電灯下にポツンと置かれたベンチ。
そこに一人の女が、腰かけていた。
しっかり揃えた膝上に、小さな冊子を開いている。
おもむろに左腕をあげ、腕時計を確認したようだ。
時刻 21 : 20。
こんな時間でも、ローカル鉄道の終電としては珍しくない。
しかも、ホームに他の乗客は一人もいなかった。
周囲には、虫の音だけが響いている。

明美は冊子を閉じ、目を閉じた。
昼間のうちに、時刻表を買っておいて良かった。
気休めにすぎない安堵感。
それでも、無いよりはマシだった。
まだ私も故郷の生活を覚えているのね。
明美は、僅かながらに唇をほころばせた。
今度来る最終列車を逃したら、予約を取っている宿泊先に辿りつくことはできない。
このような田舎駅にタクシーが待機しているはずもなく、駅周辺に宿泊施設なども当然存在しない。
本当だったら、実家に一泊でもすればよい。
しかし、明美には、それができない理由があった。

明美の口から、ゆっくりと煙草の煙が吐き出された。
ローカル線の無人駅である。
ここも禁煙なのかしら？
不意に芽生えた疑問に、明美は自ら苦笑した。
自分の現状を考えれば、もっと考えなければならないことがたくさんある。
少なくとも、一刻も早く、この地から遠ざかる。
それが、明美が最優先に考えるべき事だった。

お母さんの訃報は、携帯のメールで知ったわ。

母と同居していた姉が、教えてくれた。

直接、電話は来ていない。

つまり、これは私に対して何かわだかまりがある証拠。

その事実が、私の意志を決定づけた。

危篤の連絡から、すでに3日が経っていた。

そして結局、私は母の死に立ち合うことができなかった。

自ら、その機会を放棄したようなもの。

複雑な状況と感情。

いくつかの選択肢と可能性。

最終的には、母や実家に迷惑が掛かることを恐れての判断だった。

でも、この想いは誰にも理解されない。そう、実の姉にも。

それでも、姉がメールをくれたのは、私が母の実の娘であるという事実と、家族として暮らしてきた過去に対する儀礼だったのだろう。

姉は、どんな気持でそのメールを打ったのか。

今では、私にそれを確かめる術はなかった。

お母さんは、私を可愛がってくれたね。

私が褒められると、自分のことのように喜んでくれた。

私がずるいことを考えていても、気づくことはなかった。

私を信じてくれていたの？

それとも、知っていながら気づかないふりをしていたの？

ともかく、あなたは優しかった。

十分な愛情を注いでくれたはずなのに、何故私はお母さんの元を離れたの？

いや、それはあまりに身勝手な考え。

その頃の私には、そのような考え方は微塵もなかった。

都会での華やかな生活。

それが、私の心を知らず知らず閉鎖的にしていた。

一度去った世界に、再び戻るのは難しい。
自分が負けたような気がして。
周りに笑われているような気がして。
私が戻ることで、お母さんたちまで恥ずかしいことになるんだよ。
だから、私は耐えていたの。
都会に受け入れられず、自らの限界を感じた時も。
背中に貼りついた孤独を感じながら、ずっと。

でも、きっとそれは間違いだった。
だって、結果としてお母さんの葬儀にも堂々と顔を出すことができなかったのだから。
本当は、参列する予定だった。
家の前まで、行ったんだよ。
でも、そこから足がすくんでしまった。
どうしても、中に入ることができなかった。
姉の顔を見ることも、できなかった。
皆に会うのが、怖かった。
私には、すでに故郷が無くなっていた。
そのことを、あらためて理解したの。
多分、今度来る列車に乗ったら、私は二度とこの地を踏むことはないでしょう。

遠目に仄かな光が現れ、それが次第に明るさを増していく。
それに伴って、車輪の音が聞こえるようになった。
ホームに入ってきた列車は、案外小さな音を立てて停車した。

明美は、目の前のドアから列車に入る。
列車は三両編成で、そこは最後尾にあたった。
明美は景色の見やすいように、入口から向かって反対側に座した。
しばらく闇の景色が続き、やがて少しの光群が現れた。

明美の目から、涙が溢れている。
かつて、東京に向かう時も、そうだった。
しかし、今回の涙とは意味合いが違う。
あの頃は、希望が含まれていた。
今は？
少なくとも、明るい未来を感じることはできない。
母の死と、故郷との完全なる決別。
喪失感だけが、明美の身体に残っているだけだった。
やがて光群も見えなくなり、明美は静かに目を閉じた。

自分が眠っていたのかどうかも分からない。
しかし、明美が再び目を開けた時、車内の状況が変わっていた。
電球が切れかけているのだろうか？
室内灯は、不快な点滅を繰り返している。
温度が下がったのか、それとも自分の体に異変が生じたのか。
明美は、妙な寒気を感じた。

ふと見ると、向かいの座席に男女の姿が見てとれた。
いつの間に、乗ってきたのだろう。
僅かな時間、目を閉じていたが、その間に列車は停車したのだろうか？

明美は、その男女をつぶさに観察した。
男の方は、二十五歳ぐらいであろうか。
精悍な顔立ちをしている。
金色に染めた短髪で、どこことなく遊び人風情だった。
しかし、その顔に生気が感じられない。
目もどこことなく虚ろで、焦点が定まっていなかった。
どこかで見たような気がする。
しかし、それがどこだったか.....。

その隣の女性にも、違和感があった。
男にピッタリ寄り添っているものの、微動だにしない。
体型と服装から、妊娠しているようだった。
長い黒髪に顔がすっかり隠れ、表情を見てとることができない。
しかし、明らかにその二人の間には異様な空気が漂っている。

列車の振動が、男女の身体を揺する。
その揺れが、次第に勢いを増す。
明美は、声を聞いた。
動物の呻き声。形容するなら、そのような語句が相応しい。
喉の奥から絞り出されるような不快音。
それが、黒髪の奥から聞こえてくる。

不意に、女性の手が振り上げられた。
その指先に、鋭い爪が見てとれた。
爪は、男の皮膚に喰い込んだ。
おびただしい血液が、飛散する。
女は更なる咆哮をあげながら、鋭利な爪を凶器に男の肉を削いでいく。
真っ赤な肉の塊が飛び、骨片が散らばった。
男の悲鳴が、車内に響く。
その悲鳴に混じって、赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。
見れば、女性の下半身が大量の血にまみれていた。
あまりに凄絶な光景に、明美は席を立ち、走りだした。
妙に重たい、連結部のドアを開け、なんとか隣の車両へと移動した。

あっちゃん。

ママとパパの出逢いは、話したかしら。

私が挫折を味わっていた時、パパと出会ったの。

正直、容姿はママの好みじゃなかったわ。

故郷で言い寄ってきた男の子たちの方が、格好良かった。

もともと、その人たちでさえ、当時の私は選り好みできる環境だったのよ。

その時のプライドは、まだ私の中に残っていた。

だから、私はパパを拒絶した。

近づいてくるパパから、あえて離れるようにした。

でも、日によって私の中で寂しさとプライドの配合が変わったの。

寂しさが勝った時、私はパパを少しだけ受け入れた。

プライドが勝った時、私はパパを拒絶した。

その繰り返しは、暫く続いた。

普通なら、パパが怒って去って行くはずだった。

ママ、思ったことがあるの。パパにはプライドはないのか？って……。

それでも、パパは私の傍にいた。

温かく見守っているようだった。

結局、憧れた地で私を認めてくれたのは、パパだけだった。

そうして、ママはパパと結婚したの。

挫折を引きずった結婚だったけれど、それなりに幸せを感じたこともあった。

あっちゃんが生まれた時、本当にそれを噛みしめた。

パパも、その頃は一生懸命だったような気がする。

何をやらせても不器用だったパパだけれど、愛情だけは十分だった。

何故なのだろう？

そのパパが、関心を失くしていったのは。

私があっちゃんの為に考えることに、パパは反対するようになったの。

決して私に反対などしたことがなかったパパなのに。

ひょっとしたら、パパはあっちゃんへの愛情を失くしたのかもしれない。

ママは、その不安を毎日募らせるようになった。

あっちゃんには、色々なものが必要だった。

だって、あっちゃん、才能があったから。

ママができなかったこと。

あっちゃんなら、それが可能なの。

小さいうちから訓練すれば、その才能はもっと伸ばすことができる。

あっちゃんが大変なのは分かるけれど、皆が遊んでいる時こそ才能を伸ばすチャンスなの。

あなたは、ママの期待に応えようとしてくれた。

小さいながらも頑張る姿は、ママの胸を打ったの。

だからママは、自分が考えうる全てを貴方に与えようとした。

パパは、ダメよ。

あっちゃんの才能を信じていないのだから。

もっと、自由に育てよう。

その言葉が、ママには信じられなかった。

あっちゃんの将来を、ママの夢をパパは諦めろと言ったの……。

隣の車両に移ると、再び静寂が訪れた。

耳を澄まして、聞こえてくるのは列車の車輪の音だけだった。

明美は振り返り、後ろに気配がないことを確かめると、あらためて車内を見渡した。

車内の温度が下がっている。

それとも、自分の体に走った悪寒のせいかもしれない。

窓ガラスに映った自分の顔が、妙に白い。

血の気が全くなくなってしまったようだった。

唐突に、強烈な臭気が鼻をついた。

明美は、思わず咳きこんだ。

その臭いに、覚えがある。

吐き気がこみ上げ、どうしようもない不安が脳内を駆け巡った。

前方より、床を滑らかに伝わってくる液体。

暗い照明のせいもあってか、ドス黒く見える。

それが、血であることを明美は漠然と感じ取った。

まるで、証明が強まったかのように、明瞭な輪郭が出現する。

それは、たちまち人の形となった。

中央に一人。

長い髪の女だった。

こちらに背を向けて、しゃがみこんでいる。

その表情は、こちら側からでは分からない。

低い、嗚咽を漏らしているようだった。

「あの、大丈夫……」

明美が声を掛けても、女に動く気配はない。

明美が女に接近すると、もう一つの輪郭が出現した。

ちょうどそれは、女の前に位置した。

スーツを着た男性。

それが、うつ伏せになって倒れ込んでいる。

女は、それをただ凝視するばかりだった。

尋常でないのは、男の首だった。

それが、あらぬ方向を向いている。

およそ、不自然な角度を保ったそれは、明らかに骨折しているとしか思えなかった。

その二人の下を、血の海がみるみる広がっていく。

「次は～」

車内放送が流れた。

しかし、それはノイズによってかき消され、明美の耳にきちんとした言葉として入らない。目の信じがたい光景からも、目を逸らすことはできなかった。

おもむろに、男の体が動いた。

ゆっくりと、立ち上がる。

顔を外の窓に向けながら、歩みは女に向かっていった。

女の悲鳴が、上がった。

耳を覆いたくなるような、凄まじさが込められていた。

男の顔は、相変わらず女には向いていない。

だらんと垂れた頭は、ちょうど明美と向き合う状態になった。

一瞬、男が微笑を浮かべたように思う。

それに、どのような意味が込められていたか？

明美は、戸惑いの表情を浮かべた。

悲鳴の止まぬ女の口に、男の指がねじ込まれた。

女の身体は、激しく抵抗を示した。

次の刹那、異様な不快音が周囲に響いた。

何かを剥すような、切り取るような……。

それは、肉の組織が破壊される音だった。

男の指は女の舌をつまみ、信じ難い怪力を発揮したのだった。

女の口から噴出される血液は、周囲へと飛散した。

「ひいっ」

明美は短い悲鳴を上げた。

明美の足元に、男がねじり取った舌片が転がった。

あっちゃん。

いつしかママは、パパを憎むようになったの。

私の邪魔をする存在でしかなかった。

それも、しょうがないかもしれない。

だって初めからパパは、私に相応しい存在ではなかったのだから。

でも、私は諦めなかった。

一度諦めた悔しさを、もう一度味わおうとは思わなかった。

そんな時、私は彼と出会ったの。

彼と一緒に時間は、いつも楽しかった。

パパにはない、不思議な魅力を彼は備えていた。

この人なら……。

私の夢を実現できるのは、彼だけのような気がしたの。

私は心の内を全て打ち明け、彼はそれに応えてくれた。

だから、二人で計画したの。

新しい人生。

夢への扉を開くこと。

パパが居なくなれば、全てうまくいく。

あっちゃんの将来も約束される。

私の夢も、実現される。

そう、パパは邪魔だった。

彼なら、あっちゃんも大切にしてくれるわ。

あっちゃん、最初は寂しいかもしれないけれど、すぐに新しい環境に馴れる。

あっちゃんだって、格好良いパパの方が自慢できるでしょう。

もともとママの周りには、こういう人達ばかりが居たの。

パパみたいな人は、一人もいなかった……。

明美は、ドアを開けた。

三両編成の最前列。当然、先端には運転手が乗っているはずだ。

後部から、凄まじい悲鳴が鳴り響く。

明美は耳を覆い、走り出した。

不意に、車内灯が消えた。

闇に包まれた車内を、車輪の音だけが鳴り響く。

明美は立ちすくみ、周囲に広がる不穏な空気を感じ取っていた。

その流れに沿って、人語らしき音が聞こえてきた。

これは……。

明美の記憶が、ほんの数時間前に遡る。

母の葬儀。

僧侶のお経を唱える声を、明美は実家の塀の外で聞いた。

自分のいるべき場所に、私は入っていくことができなかった。

明美は、そのように考えている。

姉や親族が、自分を見たらどう思うだろう？

田舎を飛び出し、都会を求めた自分は、どう映るのだろう。

ましてや、あんな事件の後なのだから……。

2日前、テレビのワイドショーに明美の姿が映った。

夫と息子を亡くした被害者。

明美は、当然そうあるべきと思っていた。

ところが、実際の映像は、彼女があたかも犯人であるかのような扱いだった。

番組のコメンテーターも明言こそ避けたが、意図は見え見えの発言を繰り返した。

苛立たしげにカメラを避ける自分の姿。それが、世間に晒されている。

テレビ局を非難しても、自分を擁護してくれる存在は無かった。

彼との連絡も、断っていた。

しばらくは、二人の接点は隠さなければならない。

携帯電話の利用には、十分な注意を払ったはずだった。

明美と彼の共謀が暴露される可能性は、極めて低い。

それなのに、この報道のされ方は……。

もしかすると、既に彼は逮捕されているのかもしれない。

その裏付けがあって、マスコミはあからさまな報道を繰り返しているのかも。

そのため、明美は母の通夜に参加しなかった。

葬儀の行われる実家を素通りし、軽く眺めたにすぎない。

警察らしき存在は感じられなかったが、明美はこれを機に遠方へと旅立つことを決めていた。

彼の軽薄さに呆れ、息子のあつしを失ったことに悲しんだ。

事故に見せかければ、絶対大丈夫さ。

何故、彼のそのような軽薄な一言を信じてしまったのか。

その愚かさに気づいたのは、原型を留めない自家用車から漂う血臭を嗅ぎ、変わり果てた夫と息子の姿を目にした時だった。

逃げるように実家を後にした。

あらかじめ買っておいた時刻表で、ホテルのある辞鳴市駅までの最終電車の時間は確認してある。

誰にも顔を合わさぬよう、帽子を目深に被り、できるだけ早足で移動した。

自分の育った世界なのに、既に懐かしさは感じられなかった。

おそらく、自分は二度とこの地には来ないだろう。

明美は、漠然と感じ、定刻どおりに訪れた列車へと乗り込んだのだった。

再び、電灯が点いた。

明美は誰もいない座席に腰を下ろすと、ハンドバッグから冊子を取り出した。

精神の昂りを、必死に抑えてみる。

今、自分に起きている出来事を客観的に見直してみる。

全ては、非現実的なことばかりだ。

ここ数日の精神的負担を考えれば、普通でいられる方がおかしいかもしれない。

夫と息子。それに母。

三人の死は、自分がこれまでに経験したことの無い、大きな出来事だった。

夫に愛情は無かったが、息子には溢れんばかりの感情があった。

そして、母に対する想いは、これもまた違った感情を覚えていた。

意識しなくとも、自分にとっての最終的な拠り所。

これだけの精神バランスが乱れれば、幻覚を見ることだって当然かもしれない。

やはり、早目にこの地を離れよう。

明美は、一度立てたプランを訂正するつもりでいた。

辞鳴市のホテルをキャンセルし、行けるところまで行ってみよう。

持っている冊子をめくる。

たしか、143ページだったはず。

しかし、開いたページに列車のスケジュールは記載されていなかった。

明美の表情が、曇る。

そこには.....

イギユウ・マサタカ。27歳。

定職につけない苛立ちから、妊娠中の妻に暴行。臨月まで間もない状態だったため、母子ともに殺害。

認定。

明美は、怪訝な表情を浮かべてページをめくる。

サダマ・ミズキ。24歳。

上司を誘惑、不倫。子供ができたと偽り、巨額の慰謝料を請求。更に薬物で自殺にみせかけ殺害。

認定。

ニシダキ・アケミ。34歳。

私利私欲のため男と共謀、夫および実子を事故死に見せかけ殺害。

認定。

明美の顔は、蒼白になった。

これって、私のこと……。

何故、このようなことが書かれているのか？

イギユウ・マサタカ？サダマ・ミズキって誰？

「あっ」

明美の記憶が、甦る。

昨日の昼食の時だった。

明美は、なるべく小さなカフェに入った。

そこでパスタを注文し、視線を店内に置かれたテレビに向けていた。

テレビには、敏感になっていた。

いつ、自分の姿が映し出されるかもしれない。

変装はしているが、気が気ではなかった。

昼時のワイドショーで、イギユウ・マサタカの顔写真が映し出されていた。

本に書かれているとおり、妊娠中の妻に暴行し、子ども死んだと報道されていた。

もう一つは、辞鳴市駅の構内だった。

指名手配のビラが、いくつか貼られているコーナーがあった。

もちろん、自分が出ているのではないかという危惧が最優先であった。

しかし、そこに自分の手配書はなかった。

代わりに、同じ女性のサダマ・ミズキの顔が印象付けられた。

思い出された二人の顔。

それが、今の体験と一致した。

列車内での不可解な出来事。

犠牲者は、あの二人ではなかったか？

明美は、冊子の表紙を確認する。

『地獄表』

文字が変わっていた。

確かに、買った時は時刻表だったはずだ。

一体。これは……。

明美は、母の言葉を思い出した。

この世には、地獄がある。

迷信のようだけれど、悪い事をする人間にとって、それは確かに存在するのだと。

地獄への道筋は、地獄表が示す。

これは旅の計画にあらず、地獄の計画表としてこの世に現れる。

存在を、知るものはいない。

何故なら、それは地獄に行く人間だけに存在しうるもの。

地獄への旅人だけが、目にすることができるもの。

この世とあの世をつなぐ地獄の門。

明美は、自分の傍らに人の気配を感じた。

白い着物を着ている老婆が、立っている。

「お母さん……」

明美は、母の顔を覗きこんだ。

下を向き、虚ろな表情の母親。

その手には、不気味な光を放つ包丁が握られていた。

「おかあさん……」

明美の目から涙が溢れた。

指先は、必死に冊子のページをめくる。

自分の名前が書かれた次のページ。

そこに、母の名前が記されていた。

オニサキ・タエ。71歳。

実娘殺し。認定。

車内に迷い込んだ蛾が一匹、出口を求めて鱗粉を飛ばす。

明美の悲鳴が上がったが、すぐさま汽笛にかき消されていった。

列車はさらにスピードを増し、夏夜の闇へと姿を消した。

暗黒の欠片 vol. 3

<http://p.booklog.jp/book/19641>

著者：奇怪伯爵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkaiki0710/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/19641>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/19641>